を通ることとし、全員火炎を潜り強行突破。川州は先程橋上から見て知っていたが近寄ると川辺で幼い子どもが「お母さん、助けてくれ」と叫び力尽きてかバタンと顔を水面に落とす。息苦しいのか、また顔を挙げて、「お母さん、助けてくれ」と繰り返しているが、幼い子どもが死力を尽くして呼べども、求める母の姿見当たらず。

爆発の破片はここにも大きな音を立てて落ちてくる。全員を常盤橋の下に誘導する。

常盤橋より川下は今猛烈な火炎で燃えているので避難の方向は自然に定まる。川上の鐃津鉄橋の下を通り川上に進む事とした。橋より川上の川州は小さく何故か多くの人が重なって死んでおり足を踏み入れる場所もない。破片は落下してくる。

手を合わせ死者に許しを請い、死体を踏み越えて進む。鐃津鉄橋の下に来れば、機関車と貨車が三台橋上で脱線転覆しており、貨車に積んであった玉ねぎが落下して山となっている。食料不足でモッタイナイ。ここを通り約三百メートル北の目積めしてない石垣で三段の人櫓（やぐら）を組み、後続の生徒は靴のまま続けて私達の背中を踏んで堤防の上へ。最後に残った人櫓の人も上から順に上り、人櫓の一番下の土台となった人は非常に苦労してやっと堤上に上がる事が出来た。この地は山に続く安全地帯である。

この地には火災が及んでいない。「助かった」これで案内の仕事の大半は完了した。

全員まとまって鐃津神社境内に入る。社殿は北側に向かって倒壊していた。火炎から逃れていた。全員境内で小休息。更に東に向い東照宮の下を通って東練兵場に入る。草原草深く背の高さ位いである。草踏み分けて進む。突然視界が開ける。今までうす暗かった視界に突然白昼の姿を見せる。向洋西端の岩山（今は姿を消している）が白昼に輝いている。これでやっと完全な安全地帯に出た事を実感させた。

生徒一同を集め「南約一キロメートルが広島駅前。今盛んに広島駅周辺が燃えている。君たちが市内に安全に入れるのは、東大橋か宇品線の鉄橋の二つの橋しか無い。大正橋は通行不能と考えなさい。比治山橋に出るか、丹那を回って御幸橋に出るか、安全な方法を選んで家に向かって欲しい。ここで解散、元気で学校でまた会おう」で解散した。